

特集・エコミュージアム

地域を学ぶ場としての エコミュージアム

浅野敏久

広島エコミュージアム研究会

エコミュージアム。この言葉を目にする機会は増えたが、一般には見慣れない言葉である。エコミュージアムとは何なのか、さまざまな議論があつて明確ではない⁽¹⁾。筆者が紹介する場合、エコミュージアムとは、地域を一つの博物館とみなして、地域の構成員である産・官・学・民がそれぞれの持ち味を活かしながら、当該博物館（＝地域）の魅力を高め、よりよい運営を図ろうとする運動、あるいはそれを実現する仕組みであるとし、地域の資源を見出し、新しい価値を与える住民主体の活動で、個々の資源とそれにかかわ

る人たちを結びつけ、地域を学ぶ場とするとともに、地域の持続的な発展に寄与することを目指すものであると説明している。

エコミュージアムの定義の1つに「エコミュージアム、それは学校である」というフレーズがある⁽²⁾。ここでは、この学びの場ということに焦点をあててみたい。その際に、実際に筆者がかかわっている広島エコミュージアム研究会（以下、EM研）を例にあげて話を進める。

EM研は、既存のいくつかの活動をゆるやかにまとめることからはじめた（2000年）。環境教育や地域づくりなどの活動をしていた人や、環境

や地域に関心をもっていた人たちを、メーリングリストによって結びつけ、電子メールのやり取りから活動の相互交流や新たな人材発掘を図ることを狙いとした。メーリングリストが組織の実態なので、会の規約などはないし、代表も事務局も会員も不明確である。リスト登録者を会員と考えれば、05年9月末時点で、メンバーは約110人

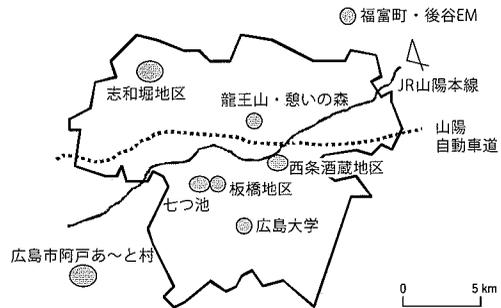


図1 EM研のメンバーがかかわっている活動場所（サテライト）。東広島市は2005年に合併したが、図の範囲は旧市域である。もっともEM研の活動は行政区とは関係なくなされている。



写真1 志和堀サテライト (小さな自然学校「ホタルの宿」)。この民家を借りて、2000年から05年まで、季節に応じた自然体験や学習会などを行った。とくに、5月末の夜、ホタル見物者向けに屋内をにわか博物館に改装して展示やイベントを行った。

ほどである。
活動場所は定まっておらず、メンバーがそれぞれかわっている場所がエコミュージアムのサテライトである(図1)。クチコミでメンバーを増やしている、当初メンバーの指向性を反映して里山保全や農地保全の活動がなされているところが多い。ピオトープづくりやネイチャーゲームなど環境教育にかかわる活動のほか、酒蔵地区

の町並み保存・まちづくり活動なども含まれる。なお、EM研の名称を出した活動はごく一部に限られる。

これらの活動は独立してはばらになされているものであるが、これらをエコミュージアムの概念で結びつけることで、地域(テリトリー)の人びとの暮らしや自然・歴史とのかかわりを学び、未来を展望する機会と場を生み出す可能性が出てくる。

例えば、図1のサテライトはそれぞれさほど離れた場所ではないが、場所によってそこで問題になっていること、体験できることが異なる。里山の姿に関しても、板橋地区(後述)であれば、主たる活動地は個人の所有地で竹林化してしまったところである。竹林化は山林管理上の問題として各地で問題になっており、この活動に参加することで一般論でない具体的な竹林化を目にし、その管理のあり方を、

実践を通じて考えることができる。同じ地区で、休耕地が増えつつある地域農地の保全について考える活動もはじまった。また、志和堀地区(写真1)では、五右衛門風呂体験や茅刈り体験などを通じて、松枯れや耕作放棄、イノシシ被害、茅葺き民家の保存など中山間地域の里山の姿に直面することになる。龍王山は東広島市の特徴的産業である酒造業の水源地で酒造業者による里山保全の活動が行われている。酒蔵地区で大切にされている地下水は、市民や来訪者に町中において水源林の大切さを伝えている。福富町や広島市阿戸町でのピオトープづくりは、里山の自然を学ぶ場になっている。

このようにそれぞれの場所は、個々に完結して一定の情報を提供することができるが、言えること・言えないこと、見ること・見えないこと、体験できること・できないことがそれぞれあり、1つだけでは、盆地とか流域とかいう比較的広く、かつまとまった範

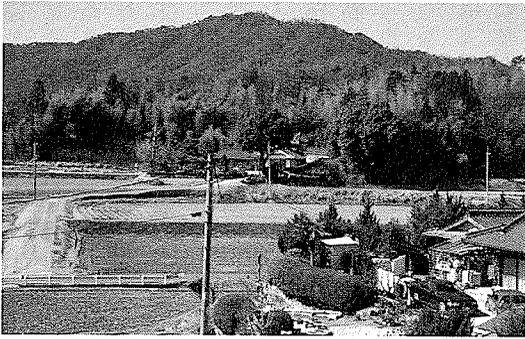


写真2 HiRACの活動場所（農家裏の竹林）。山林の面積は1haほど。

困の環境全般を学ぶ場として不十分である。複数のサテライトを束ねて意味づけ、活用することで、発信できる情報や描ける物語を大幅に増やすことが可能になる。実際問題として、連携や関連づけは容易にはできないが、エコミュージアムの考え方が活かされるのはこのような場面であるといえる。

以下ではこれらのうち、板橋地区での活動を紹介する。

あるサテライトでの活動

板橋地区は、水田や山林が残り、農村的な景観が広がるものの、単身者向けアパートが散在し、周辺では住宅団地も開発されている新旧入り交じった環境にある。ここでは、いくつかの市民グループが活動しており、エコミュージアムのサテライトとしても位置づけられる。

①「東広島サロン大学」と「HiRAC」

「HiRAC (Higashi-hiroshima Rural Amenity Club)」というグループが、96年末から、ある家の裏山をフィールドとして「里山づくり」を行っている（写真2）。このグループは、それまでのさまざまなボランティア活動等を通じて培われた人脈・ネットワークを母体としており、その1つに、生涯学習のまちづくりを市民レベルから実践する試みとして開講された「東

広島サロン大学」（93年から）がある。これは、特別な施設をもつものではなく、地区内の幼稚園で月1回程度、夕方から夜半まで、講師を招いて話を聞き、その後、自由な懇談を行う会のことで、メンバーは約160人、各回の参加者は20名前後である。内容は、国内外のまちづくりの紹介から、東広島市の植生や農業の話、コンサートや映画鑑賞などまでさまざまである。

この活動から派生して、地域の農家や農地を訪ねて回る「農業探検」と里山を見て歩く「里山探検」が行われた。そのうちに近所の農家から家の裏山を使ってみないかと持ちかけられ、自分たちの里山を創ろうと「里山づくりプロジェクト」が立ち上げられた。この場所は、かつて畑であったものの、活動開始時には容易に入れない藪になっていた。林の観察・調査から始めて、藪や竹を刈り払い、広場をつくったり、広葉樹を植えたりする活動を行っている。隣接する休耕地を開墾して市民農

園としても利用している。今では各地にこの種の活動はみられるが、このあたりでは比較的早い段階から始められたものである。

②七つ池における活動

同じ頃、近くでこの影響を受けつつ別の活動がスタートした。七つ池というため池に隣接した団地の住民有志が、団地入口にあたる場所の山林の美化活動から発展して、広場づくりや散策路づくりを行っているものである。

この団地は、細長く広がる山林をほとんどで農業用ため池（七つ池）に隣接している。住民は環境の良さを入居の動機のひとつとしたといわれ、池がきれいに保たれ、快適な水辺空間があることへのニーズは高い。しかし、生活排水が流れ込み、水質が悪化し、山林は枯れにより荒れた雑木林に変わった。さらに、ゴミの不法投棄などの問題も生じ、環境美化・住宅環境の質の向上が大きな課題となっている。活動の世話人によれば、水辺や里山に関心

をもつ住民の間から、ため池の役割を見直すべきとの声がかかるようになってきたという。ため池を、これまでのように農業用水源としてだけみるのではなく、環境を構成するひとつの要素として、親水機能を果たす場として評価しようという考え方が広まってきたのである。

そこで住民の立場からできることを、自分たちでやろうということになり、近所の里山を歩き、観察することから始めて、他のグループとも交流を深めた。そのような時に、「ため池シンポジウム」が開催され、住民とため池の管理者とが接点をもった。それを機に、ため池のゴミ回収や山林の美化活動など、ため池とその周辺環境をよくする活動が始まった。その後、一部の山林所有者が理解を示し、山を住民の好きに使ってよいことになり（写真3）、ミニ公園的な憩いの場づくりや散策路づくり、さらに団地から流れ出る生活排水の浄化実験などを行っている。



写真3 七つ池端の活動場所。子どもを集めて、ネイチャーゲームやクラフトなどを行うこともある。この時（1999年）は、子どもの他、団地の有志、土地改良区関係者らが集まった。

③板橋プロジェクト

これらの活動には市域を越えて参加者が集まっているが、これまでは当該地区のいわゆる旧住民との接点はあまり密ではなかった。一方、この地区では、とくに農地所有者は、農業を取り巻く厳しい社会環境のなかで、将来への不安を抱えており、とくに、高齢化が進み、後継者が他出して戻らない状況において、今後の農地管理をいかに

すべきかを課題としていた。地区の農家は、将来的な農地の維持管理のために、集落営農を導入するかどうかを検討したが、集落の規模の問題や、各戸の意見調整の問題などから話が頓挫してしまった。行き詰まり感を打破するために、HIRACやEM研のメンバーを交えて、意見交換をする場を設けることになり（03年）、板橋地区の農地の維持・活用を検討し、具体的な行動をおこしていく試みとしての板橋プロジェクトがはじまった。

最初の話し合いで、地区住民と市民グループとの連携が新たな展開を生むかもしれないから、まずは話し合ってみようということを確認し、この地区が抱えている問題と留意すべき資源やポイントについて意見交換した。

問題としては、地域内の農業を維持していくことが年々困難になっていること、農業の担い手・後継者がいないこと、定年後の農業や高齢者の耕作がほとんどで、どうしても農業で暮らし

を立てなければならぬわけがなく、営農というよりむしろ農地の維持管理に地権者の関心が高いこと、生産物の市場での競争力が低いこと、減反の割り当てで畑が増えることになるが、畑での耕作は労力的に負担が大きいこと、かつて日曜日や移動販売を行い、好評を博したが、実施者が高齢化し、負担がきつくてやめた経緯があることなどがあげられた。

営農意欲があまり高くなく、農業よりむしろ農地の維持管理に関心が高いというのは、ここに限らないことで、生計を立てる手段がほかにある都市近郊の農家が所有する農地を今後どうするか、農業振興とは異なる観点からの検討も必要であろう。営農意欲の高い農家に貸せばよいという考えもあるが、無償でも借り手が見つかず、休耕地が虫食いのに広がっているのが現実である。かといってこれらの土地がすべて宅地化するほどの開発可能性はなく、年々余っていく農地をどうすればよい

のかが深刻な問題になる。

一方、この地域の活かすべき利点についても意見交換され、団地住民など近所に住む消費者を直接視野に入れた生産を考えることができるのではないかと、「西条柿さいじょうがき」発祥の地という知名度を活かせないのか、大学などの人的資源を活動でできないか、などが確認された。

その後も、先進地の事例報告や近在

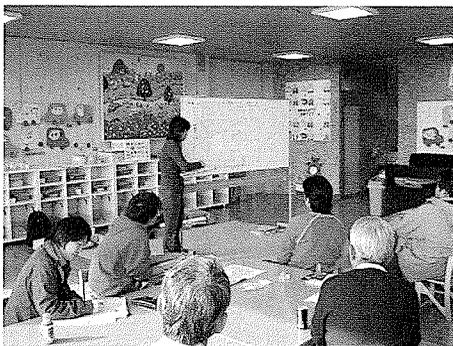


写真4 板橋プロジェクトの風景（その1）。板橋再発見ウォークというイベントを行い地区内を一回り歩き、幼稚園を会場として意見交換会を行った（2004年3月）

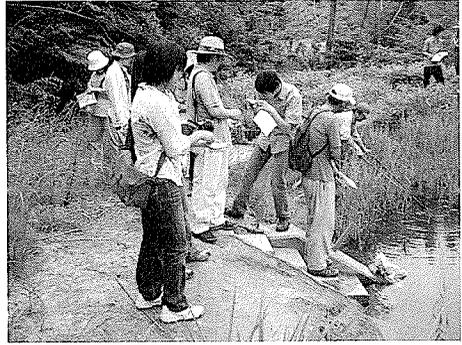


写真5 板橋プロジェクトの風景(その2)。地区内を歩きながら、地域の自然や農業、開発の現状などを確認する。このようななかから、次に何をしようかといった話題が盛り上がっていく。(2005年5月)

でのエコミュージアム活動報告など、勉強会や見学会を続け(写真4)、ちよほどその年から耕作者不在となった田んぼを幼稚園児の体験活動で使うことになり、地権者と耕作を手伝う農家、幼稚園関係者、大学生のボランティア、市民グループ関係者が協力して米づくりを行うことになった。実際にいろいろの問題に直面しながらも、活動は2年目に入り、耕作面積も3倍になった。

地区全体でみれば微々たる面積にすぎないが、それぞれ立場や意思の異なる農家と市民の結びつきを深めることで、この地区の農地保全や景観創造などの活動が模索されている(写真5)。まだ、目に見える成果は出ていないが、これにかかわる人が、地域についていろいろ考えたり、話し合ったりする機会になっていることだけは確かである。

共に学び共に動く場としてのエコミュージアム

この活動にかかわっていると、東広島市、あるいは西条盆地、賀茂台地といった地域が、エコミュージアムの理念に基づいた地域づくりに適していることに気づかされる。ここには、酒蔵や里山、ため池、赤瓦の農村景観、史跡・文化財、伝統芸能など、多くの資源がある。それらは単に「ある」というだけでなく、その価値に気づき、何とか守り活用していこうという市民の

意識や行動によって支えられている。また、大学や研究機関も立地し、エコミュージアムに不可欠な科学的な裏づけのある地域資源の評価・活用が、他の地域以上に進めやすい。

ただ、現状では、酒蔵は酒蔵、里山は里山、文化財は文化財、大学は大学といった具合に、それぞれが別個に動いていて、それらを全体的に結びつける理念や手法はなく、結びつけようという試みもない。また、あえて断っておくが、当地ではエコミュージアムが行政的にオーソライズされているわけではなく、活動が広く市民に認知されているわけでもない。何人かの有志が集まって、やってみたいと思う活動をしているにすぎない。

その意味では、当地でのエコミュージアムは、絵に描いた餅である。しかし、1つのアイディアとして、散在する多種多様な地域資源やそれにかかわる人たちを結びつける物語を提供し、うまく仕組みをつくることができれば、

そこにかかわる人たちが、自らが暮らす地域を見直したり、考えたりする場として機能するとともに、これらの活動に触れる人たちに地域の姿を伝える役割を担うことが期待される。エコミュージアムは、分野や対象ごとにバラバラになつているものを結びつける理念であるとともに、地域について共に学び、共に考え、(是非はともかく自分たちが)望ましいと思う地域づくりと共にかかわる主体的な動きを生みだしうるのである。

〔注〕

(1) 日本エコミュージアム研究会の「エコミュージアム憲章2001」では、「エコミュージアムは環境と人間とのかかわりを探る博物館システムである。それは、ある一定の地域において、住民の参加により、研究・保存・展示を行う常設の組織であり、地域社会の持続的な発展に寄与するものである」とされている。

(2) 国際博物館会議初代会長のJ・H・リヴィエールによって提唱され、修正を重ねて示されたエコミュージアムの発展的定義(1980年)の1項目となっている。この発展的定義については丹野研究所編(1993)『ECONUSEUM』や新井重三編著『エコミュージアム入門』(牧野出版を参照)。

(3) エコミュージアムでは、地域を博物館に模倣す際に、テリトリー(対象地域の範囲)、コア(中核博物館)、サテライト(テリトリー内に散在する遺産、衛星博物館)、それらをつなぐデイスカバリー・トレイル(発見の小径)という構成要素に分けてとらえることがある。

(4) 注(2)の発展的定義の1つに「エコミュージアム、それは一枚の鏡。住民は自身を認識するために、その鏡に自らの姿を映し出す」というフレーズがある。エコミュージアムに表されるのは、その地域での人びとの暮らしであり、生き方であるともいえる。

あさのとしひさ・広島大学総合科学部助教 1963年東京都生まれ。東京大学大学院理学系研究科地理学専攻博士退学。専門は社会地理学。共編著に『環境問題の現場から』(古今書院)